

## 職員リレーエッセイ

南区障害者基幹相談センター 桑原和子

数年前から、落語が好きになり、車通勤の帰り道は、いつも落語の CD をきいています。仕事で「自分はダメだなあ・・・」などと落ち込んでも、物忘れの早い私。家につく頃には、江戸時代の、のんびりした気分になっています。

実は、落語も、怪談やら人情話、人間の業を描く笑えない話など、幅広い話があるらしい。でも、私は、ただ、滑稽な話を、のんきに聞くだけの、気楽なファンです。ですが、きき続けていると、いろいろ気づくことがあります。

1つは、「落語の世界には、今なら、障害認定を受けているだろう人が、結構いる」ということ。落語では、複数の噺（はなし）に登場する、有名人が何人かいるのですが、その中の一人、与太郎は、様々なエピソードから類推すると、現代なら、たぶん愛護手帳を取得している人物です。

たとえば「大工調べ」という噺の与太郎は、大工。仕事を休むのが続き、心配した親方が様子を見に行くと、家賃を滞納して、大家に、仕事道具を取り上げられている。親方は、与太郎の特性をわかっていて、助けるところは助け、できることは自分でするよう仕向けている。大家も、与太郎の特性はわかったうえで、苦手なことに付け込み、困らせている。この噺をきく人は、きっと「与太郎のような人には、親方のような対応をすべきだ。大家のような奴はいかん」と思っている。だからこそ、噺の最後の「調べ」、つまり裁判で、お奉行様が、与太郎に有利な、粹な判決を下す一件落着の展開に、納得がいくのだと思います。

また、現代なら、ADHD と診断されそうな人がいたり、視覚障害の人がいたり。現代のドラマに、障害がある人が登場すると、感動的な話の主人公ということが多い。落語では、主人公だったとしても、全く感動的ではなく、かつ、脇役での登場も多い。そこに私は「特別な人ではない。普通に存在する人」という落語の世界感を、感じます。

ほかにも、「連携の教科書だな」と思える噺や、「良かれと思ったことが、相手の価値観に合わないこともある」と身にしみる噺。貧乏だが、「爪に火を灯すような節約ぶり」には否定的で、困った時には助け合う姿勢。働く人を大事にする親方やおかみさんの考え方・・・それは、落語を聞く人が「こうだったらいいな」と思う世界を、肩肘はらずに示しているように思えます。そして落語をきくと「うまく行かないこともあるけど、いろんな人の力を借りて、頑張ろうか、なあ～」と、ほわーんと思えます。

次は、ニコニコホーム下茂さんにつなぎます。

低料第三種郵便物承認

平成 年 月 日発行（増刊）

A J Uニコニコハウス通信（第 号）（ ）